

にいがた

北から南から



底管理するシステムは出来上がりがつつある。

教育再生会議は親の責任を強調し、「しつけ」強化の答申を次々と出してくる。偏狭な愛国心教育もブレイキが壊れたかのようにすすめられ、教科書検定は沖繩戦の集団自決でさえ否定しようとしている。新潟市でも教育委員会が、何の目的かは定かではないが市立高校で使用している沖繩戦の教科書記述を調査した。真実から目をそむける愛国心が何をもたらすか。

参議院選挙の与党大敗で美しい国づくりは、頓挫しないだろう。安倍首相の個人的な考えですんでいるものではない。石原慎太郎東京都知事の監修の映画「君のためにこそ死にに行く」の映画の割引券がすべての生徒に配布されている高校もある。この映画の感想文コンテストが全国的に推進されている。

ゼロトレランスが受け入れられ、推進される背景も、これら教育改革の流れとは無関係ではない。そしてそこで苦しむのは、生徒の声を聞き取るうとする努力を続ける教職員で

あり、何よりも学校という枠組みから放り出される生徒たちである。しかし、このことを克服する道筋は政治が変わらない限り、現場からできることは生徒の声を聞き続け対話し続けることしかない。その努力は少なくない教職員によって続けられていることは付け加えなければならない。がんばれ朝潮！

(やまうち ひでお・高校教員)

拉致問題について

思うこと

遠山辰四郎

参議院選挙で安倍自民党は大敗した。強行採決に次ぐ強行採決、年金不払い問題で責任を労働組合に押しつけ、政治資金不明朗会計が閣内からぞろぞろなどなど、あまりにも国民を虚偽にしている、と多くの有



権者が思ったからではないだろうか。この安倍首相の売りが、北朝鮮による拉致問題の交渉窓口だった。そして、拉致被害者の一部帰国で「安倍晋三」氏は、時の寵児になった。それ以来、テレビ・新聞・雑誌などあらゆるマスコミは、カラスの鳴かない日はあつても、拉致関係の記事がない日がないくらい氾濫した。

北朝鮮の社会体制・「金」家の独裁の様子・脱北者の証言・潜入カメラ映像などテレビのスイッチを入れると必ずどれかに当たる有様。その間、北朝鮮側は核兵器の実験・核保有宣言、ミサイル開発と試験発射など力の誇示で応えてきた。拉致問題は他国が我が国内で行った犯罪という面と、日本の安全保障（核の脅威）に関わる面の2つの問題が、相乗的に国民の関心を引き起こし、マスメディアの絶好のニュースソースとなった。また、自民党と政府への大きな追い風にもなった。拉致被害者及びその家族会の活動が多くのメディアに登場し、政治家

も加わって「北朝鮮への経済的圧力」と声高に叫んだ。防衛庁の「省」昇格などは、その間の「北朝鮮の脅威」に負うところが大きいのではないだろうか。

拉致被害者とその家族の方々の切なさ・苦勞はいかばかりと思うが、時の政治に利用・翻弄されているように見える。政治は「個人事」についてそんなに甘くはないと思う。昨今国内には、殺人事件などひどい犯罪が毎日のように報じられている。しかし、犯罪被害者やその家族は、精神的・物質的に多大な損害を受けているにも拘わらず、肩身の狭い思いで暮らし、生活も破壊されてしまっている事例が多いと聞いている。犯罪被害者の会が、漸く国の保障を求めて動き出したとの報道があった。また、広島、長崎の被爆者は国の保障を求めて苦難の道を歩み、被爆者への援助は不十分だらけの状態である。水俣病問題・各種公害訴訟問題などなど、患者・被害者の立場に国が、どれだけ真剣に心を寄せただろうか。拉致

にいがた

北から南から



問題でアメリカ大統領をも動かす、政府の力のいれようは突出しており、他と比較して何とも割り切れない気持ちが残る。

拉致問題が北朝鮮の国家犯罪とすれば、当然外交で解決しなければならぬ。外交の席上でのやりとりが目につく。北朝鮮の外交官は、日本が過去の侵略戦争で行った朝鮮の人たちへの残虐な歴史を、どう解決するかを迫るだろう。この北朝鮮側の問い掛けに、「靖国派」と言われる国会議員で内閣を構成する政府は、まともには答えられるだろうか。

今の政府は、「多数という力」で歴史的事実をも変えられると思っているようである。最大の「理解者」アメリカの議会からさえ、歴史の改ざんは許さないと言われているのである。「金」独裁体制を言う前に、私たちもつい六十数年前には、「あら人神」の前に特高警察と憲兵で見張られて、物言う自由は何もなかった時代があったことを、思い出すべきではないか。しかも、その時代の

為政者の流れをくむ政治潮流が、今大手を振って日本の進路の舵取りをしている日本を。高齢化社会だからといって、全て「忘れた」ですまされる問題ではない。いまアメリカは、北朝鮮の「核取り締まり」に精を出している。最近の拉致問題報道のなんと少ないことか……マスメディアの「健忘症」や「思上がり」が気になりながら今日もたらだらテレビを見て過ごす一日。

(とうやまたつしろう・新発田市)

商 売

八 木 三 男

父はわたくしが生まれる少しまえまで桐材の卸業をしていたが、昭和初年、一九三〇年前後の大恐慌で倒産した。小学生のころ、来